



尽くす喜び ひのきしん



眞明組おやさと伏せ込みひのきしん (5月25日 豊田山墓地)

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

たすけとても一日なりとも
ひのきしん、一つの心を楽しみ。

明治23年6月15日

よくをわすれてひのきしん

これがだい、ちこえとなる 十一下り目 四ッ

お道を熱心に信仰していても、欲の心遣いは何度も顔を出してきます。「これだけ一生懸命やっているのに、なぜ御守護を頂けないのか」と、見返りの姿、形だけを求めて、つい不足してしまうこともあるでしょう。だからこそ、普段からひのきしんを通して欲の心を忘れる努力を続けなければなりません。

「よくをわすれてひのきしん」とは、「対価があるか、自分にとって得か」といった損得勘定の心を忘れ、ひのきしんという自身の行動で神様や周囲の方に喜んでいただくこと。そして、その喜ぶ姿を自分の喜びとできるかどうか、いわば「尽くす喜び」を実感することが大切です。そしてその喜びは、たとえ形に現れる見返りがなくても、親神様が確かにお受け取りくださり、必ず後々結構をお見せくださるための種蒔きとなっているのです。

私たちようぼくは、親神様、教祖にお喜びいただきたいと、おちばや教会に足を運び、ひのきしんを通して身も心も尽くす喜びを実感する日々を送りましょう。

正面方加

第48回日本アカデミー賞最優秀作品賞を取った映画「侍タイムスリッパ」を観た。笑いあり、涙あり、ストーリーに引き込まれて面白い作品だった。

この映画では、「一生懸命頑張っている、誰かがどこかで見ていてくれる」という思いが込められている作品で、なるほどだなと思った。

令和2年7月6日に、教会のある街で線状降水帯により、大きな水害が起こった。何か地域の役に立ちたいと、10日間ほど毎日、ひのきしんに出て水害の後始末をした。地域の方々にも喜んでいただき、その後、社会福祉協議会やその他の出会いもあり、現在教会で実施していることも食堂へと繋がっている。

私たちの心や行動は、親神様、教祖がいつも見てくださっている。陽気ぐらしに向けて一生懸命、明るく陽気に歩みたいものである。

(義)

《5月月次祭 挨拶》

おさづけを機を逃さず取り次いで
成人の歩みを着実に進めよう

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃からお道の信心にお励みくださり、時旬の御用にご丹精くださいまして、大変ご苦勞様です。ただ今は、5月の月次祭を滞りなく勤めさせていただきまして、誠にありがたい次第です。

教祖は、子供の成人を促されて現身を隠されました。御姿を隠されたのは、皆が心置きなくよろずすけのおつとめを勤められるようにとの思召からであり、世界たすけの扉を開かれてからは、広く人々におさづけの理をお渡しになり、このおさづけに存命の理のお働きをお現しになって、不思議たすけの御守護を成しくださるようになりました。

つまり、陽氣ぐらしへ建て替えるための手段としておつとめを教えられ、おさづけを渡してくださいになったのです。ですから、つとめとさづけこそがようぼくにとつてのおたすけの基本中の基本です。このおつとめの理を取り次ぐのがおさづけですから、取り次がせていただくことが大切であるのは言うまでもありません。

神様のお言葉に「一日生涯」という言葉があります。これは、一日一日を一生涯と思って、その日を大切に通るといいうように私

たちは解釈をしています。このように思案することは大切ですが、おさしづの中に出てくる「一日生涯」というお言葉は、そのほとんどがおさづけの理を渡される際に出されているのです。つまり、ここにある「一日」とは、おさづけの理を戴いた一日であって、「この日の心を生涯忘れないように」というのが本来の意味です。ようぼくに生まれ変わった大切な日であり、この日の心を忘れずに持ち続けてくれと仰せられるのです。

私自身のことを思い出してみましたが、初めておつとめ衣を着けて、本席の場で真柱様の御前に額ずいて両手を差し出した、そのときの緊張感は忘れてはいません。そして、ようぼくになった直後に、父と、夫婦で会長宅に住み込んでおられた夫人さんに取り次ぎました。父は痛風の激しい痛みで歩くことができませんでしたが、翌日に「梅夫、痛みが取れたぞ。初めてのおさづけはよく効くのう」と言って元気に本部に出掛けていきました。夫人さんは心肥大の患いで、動いては休み、休んでは動くという状態でしたので、三日三夜と仕切って取り次ぎましたが、その翌日の検査で、肥大はないという診断が出て、大変喜んで、それから毎日元氣にひのきしんをするようになってくださいました。このとき私は18歳でしたが、「おさづけって本当にすごいな」と身をもつて感じることでできたのです。このときの気持ちは生涯忘れてはいけないと改めて思いました。

おさづけの理は道の路銀であると教えられます。ようぼくがおたすけをさせていただく、そのおたすけから次のおたすけに向かう路銀であり、またおちばへ帰らせていただくための路銀です。そしておさづけを取り次ぐことで、存命の理を実感することが

できますし、何よりも教祖を身近に感じるようになるのです。

「諭達第四号」にあるように、一人ひとりが教祖の道具衆であることの自覚を高めて、たすけ一条の芯であるつとめとさづけをもつて、勇んでおたすけに励ませていただきたいのです。

周囲に身上や事情で悩み苦しむ人がおれば、おつとめでその御守護を真剣に祈願することはもちろんのことですが、ただ陰から祈るだけではなく、声を掛け、足を運んで直接おたすけすることが肝心であります。その人の悩みが身上ならば、臆せずおさづけを取り次ぐことです。このおさづけに教祖は存命の理で、必ず働いてくださるのです。効かないおさづけなどありません。その場ですぐに形に現れなくても、何も案じる必要はないのです。

たん／＼とよふ／＼にてハこのよふを

はしめたをやがみな人こむで 十五 60

このよふをはじめたをやか入こめば

どんな事をばするやしれんで 十五 61

と教えていただくように、おさづけを取り次ぐときには、御存命の教祖がよう／＼に入り込んでお働きを成しくくださるのですから、必ず病の根は切つてくださるのです。

お互いに教祖の道具衆として、教祖が教えてくださったおつとめを勇んで勤め、教祖がお働きくださるおさづけを機を逃さず取り次いで、よう／＼としてのおたすけを勇んで果たして、教祖百四十年祭への成人の歩みを着実に進めさせていただきたいと思えます。

今月も勇んで月次祭を勤めることができました。大変ありがとうございました。

(要約)

立教百八十八年 五月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の豊かな御恵に護られて、遍く世界にたすけの理をお垂れ給い、陽気ぐらしへと導き下さいます親心の程は、誠に有り難く勿体無い極みでございます。

また先月十八日の教祖誕生祭は世界各地から帰参した道の子達と共に御誕生日を慶祝申し上げ、続く翌日は大勢の参加者を得て婦人会総会が開催されました。更には二十九日の全教一斉ひのきしんデーで、全国各地に於いて報恩感謝のひのきしんが実施されたことも、また有り難き次第でございます。

私共は、日に月に賜る御守護を片時も忘れることなく、御恩報じに努め励ませて頂いておりますが、その中にも、今日の吉日は、おちばよりお許しを頂きました芽出度き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、奏でる鳴物に調子を合わせ、心晴れやかに、座りづとめ、陽氣てをどりを勤めて、五月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な一日と参き集いました芦津の道の子達が、日頃賜る御厚恩にお礼申し上げ、一層の成人を誓つて共につとめに勇む状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

さて、この月の二十五日と二十六日は、教祖年祭に向かう今日の旬におちばに身を以て伏せ込ませて頂きたいと、分離教会と合同で「眞明組おやさ」と伏せ込みひのきしん」を実施させて頂きます。私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、よう／＼は「残らずちばから救ける。万事何から大切、第一のたすけ、おちばより救ける。さあ／＼心置き無う運んでくれるがよい」とのお言葉を胸に治めて、おちばに心を寄せ、足を運び、誠真実を尽くして、おちば一条に信仰を磨かせて頂きたいと存じます。そして尊きちばの理を戴いて、各地でおたすけと丹精に励み、たすけ一条の道を心勇んで歩ませて頂く所存でございます。

何卒、この上共に温かき親心に私共一同をお育て下され、成人の歩みをお導き下さいまして、教祖百四十年祭に向かう時旬の御用を、一手一つに明るく勇んで勤めさせて頂けますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《5月月次祭 神殿講話》

親の思いに沿い道具衆として
持ち場立場の役目を果たそう

役員 岩切正教

治めていくことが信仰

今から20数年前ですが、ある青年が「将来のことを相談したい」と手紙をくれたことがありました。その青年の実家は福岡で、お店やビルの看板を作る仕事をしており、父親は根っからの職人で、仕事にはとても厳しい人でした。

その長男である青年は、一生懸命父親を手伝って仕事をするのですが反りが合わず、衝突することが度々ありました。父親は気が短く、絶対妥協しない性格で、そんな父親に我慢できなくなった青年はある日、仕事の仕上げのことで父親と口論になり、取っ組み合いのけんかを始めたのです。

その様子を見かねた母親は、身をしていて間に割って入り、どう

にかけんかは収まったのですが、父親は一言、「出て行け!」と捨て台詞を吐いて職場に戻ったのでした。母親はご主人と息子の板挟みで、ずいぶんつらい思いをされたと思いますが、その青年に「島原に行きなさい」と、私共の教会に行くことを勧めてくれたのです。

その青年は、人に好かれ、教会のことを我がことのように熱心につとめてくれました。教会の暮らしが合っているんだと思うほどでした。それから1年経ったとき、布教の家に行きたいと言い出したので、翌年の4月から布教の家東京寮に入寮しました。その布教の家を退寮するひと月前、「退寮後、どうしたらいいでしょうか。会長さんの言う通りにします。お心を煩わせて申し訳ありません」と手

紙をくれたのでした。

私は、すぐに布教の家に電話して、「自分はどうしたいのか」ということを率直に聞くと、「父親は、早く帰ってきて家の仕事を手伝ってもらいたいと言ってますが、私は、このまま道一条で通りたい」と、布教で身を立てる思いであることを打ち明けてくれたのです。

道一条で通りたいと言ってきたときは、願ったり叶ったりで、私は心の底から嬉しかったのですが、会長になったばかりで、未熟と言いますか、不安と言いますか、人の将来を決断する勇氣も自信もなかったのです。そこで、悩んで悩んで悩んだ挙げ句、私の父親に相談することにしたのです。そして、その青年のありのままの気持ちを伝えると、父に「おまえはどう思うんだ」と逆に聞かれたのです。

私は、素直に「道一条を通ってもいい」と答えたら、「ダメだ、親が喜ばないことをして何になら」と、間髪入れずに、私を否定したのでした。親の言うことを聞かないと、我が身も立たず、良い

運命にはならないということを、私に仕込まれたかと思うのです。その青年は、今では父親をしつかり支え、家業の発展に努めてくれています。毎月、私共の月次祭には、必ず仕事を休んでつとめてくれていきますし、お盆と正月の休みには、今でも「青年づとめ」という気持ちになって、教会で御用をつとめてくれています。父親も信仰に理解を示してくださるようになります、私に会うと、必ず「息子がお世話になっていきます」とお礼を言ってくくださるようになりました。教会の御用にも協力してくくださるようになりました。

もし、あのとき、道を通していれば、青年の父親は、お道を恨んでいただろうなと思うと同時に、親の言う通りすることが本人のためであり、治まっていく道であり、治めていくことが信仰であると、改めて思い知りました。

娘だけはたすけてください

私たちの信仰は、親の声を神様の思召と悟って、御用をつとめて

おりますが、私が会長になって3年後、妻が大教会のおつとめ奉仕者の御命を賜りました。

それから、妻と娘2人で、毎月大教会への帰参が始まりました。

この20年、コロナのときの数回を除いては毎月欠かさず、大教会に帰らせていただけることは本当にありがたいことだと思っております。娘が幼稚園のときも小学校のときも、大教会に帰ることをお願いすると、娘さんを連れて行ってくださいと、理解を示してくださったので、島原と大教会を日帰りで、あるいは1泊2日で大教会の月次祭をつとめておりました。

娘は3歳から10歳までの7年間、



母親に付いて、毎月、大教会・おぢばに帰りました。小さいときから、神様の所へ、おぢばに近い所にと足を運ぶことが、とても大切なことだと思っていたようです。

その娘が、小学校1年生の9月24日、突然、頭が痛いと言いだしたのです。最初は、おぢば帰りの疲れだろうと、さほど心配もしなかったのですが、嘔吐を繰り返すようになり、心配になった妻は、小児科に連れて行つたのです。特に異常も無く、痛み止めをもらって帰ってきたのですが、翌25日も痛みが治まらず、学校を休ませました。その日は、母が脊柱管狭窄症の手術を終えて退院する日で、妻は福岡まで母を迎えに行つたため、娘は教会で一人、8時間の間、何も口にせず、ただ吐き気を繰り返し、目はうつろになつて衰弱し切つておりました。

その日の夜、私が大教会の当番を終えておぢばに向かう道中、妻が泣きじゃくりながら電話を掛けてきたのです。聞けば、「痛みが酷くなり、ひたすらおさづけを取り

次ぐ痛みは治まらず、狂つたようにのたうち回る。もう手の施しようがない」と言うのです。電話の向こうでは、娘の「ぎゃー」という悲鳴と「なんとかして、死ぬ、死ぬ」という声が聞こえてきます。私は、取り乱した妻を「おまえがしっかりしろ」と声を荒立てたのですが、電話を切つた後、「脳に障害でもあるのかな」「死んでしまふんじゃないのか」と、急に不安になつて、居ても立つてもいられず、息苦しくなつたのです。このまま教会に帰ろうかなと思いましたが、修養科教養掛の御用があつたので、その夜は詰所でひたすら娘の無事を祈りました。

翌朝、私も妻も一睡もできず、26日の朝を迎えたのですが、状況の変わらない娘を「とにかく脳神経外科に連れて行け」と、私共の地域で、腕がいいと評判の脳神経外科に走らせたのです。

私は足早に御本部に行き、自分の心得違いをお詫びし、「私はどうなつても構いませんので、娘だけはたすけてください」とお願いし

たのです。

それから間もなくして、かぐらぶとめが始まつたのですが、不安を紛らわせるかのように、大きな声で必死にみかぐらうたを唱えながらも、心の中では、「子供がいないところに子供をお与えいだいた、それだけでも喜ばなければならぬ」「7年間だつたけど、楽しみを与えてくださったんや」「幸せな時間をくださった、まず、それに感謝しよう」と言い聞かせるのです。心配でしよがなかつたのです。

親の思いに沿い、

御用を一生懸命担う

そうこうしているうちに、かぐらぶとめが終わりました。そして、前半が始まつたそのとき、携帯電話が鳴つたのです。父からでした。当時、教区長でしたので、結果内にいるはずの父が電話を掛けてきたのです。南礼拝場の階段を降りて電話に出たら、いきなり「おまえが真つ先におつくしをつくらなかつたら、誰がつくるんや!」

と怒鳴られたのです。娘の身上のことを聞きつけた父は、「御用を何と思ってるんや」「必死になって御用をつくらんと、たすかるものもたすからんぞ」と言ったのです。

父にしてみれば、腹に据えかねたものがあつたと思うのです。娘の身上もさることながら、母親の脊柱管狭窄症の手術に対して、「なぜ身上の思案と、おつくしの相談を、会議でしなかつたんだ」と怒りを露わにしたのです。私は、周りに余計な心配や、秋季大祭の御用も控えていたので負担をかけたくなかつたこともあり、まして肉

親だから、あえて身上のおつくしの相談をしなかつたのですが、「それが人間思案だ」と、父はカンカンに怒っていたのです。それから延々と、教会長としての不甲斐なさ、親孝心の足りなさなど、思っていることをぶちまけたのでした。

実は母の手術の理立てとして教会にあるお金をかき集め、大祭の心定めの半分を既に運んでいたの

です。その心を見透かして、父は、会長がその気にならないと、周りは付いてこないぞと、私の心得違いを正したのだと思うのです。

後半が始まり、おつくしの代わりになる御用はないだろうかと思案を巡らせながらも、大祭の心定めの1割、100万つくろうと決めた瞬間、娘の身上が全く心にかからなくなつたのです。あれだけ娘の身上が心配で、胸が締め付けられる思いがしていたのに、全く気にならなくなつたのです。

十二下り終了の合図木が鳴つた瞬間、再び携帯電話が鳴りました。恐る恐る携帯電話を見たら、妻からでした。「先ほど説明がありました。脳は異常ないそうです。何が原因だったかは分かりませんが、もう大丈夫です」との声に、身震いするような慶びがこみ上げてきて、涙がこぼれたのでした。

娘の身上は単なる頭痛だったのかもしれない。しかし、娘の身上を通して、親孝心の心、神様にもたれて通ることの尊さ、御用を担えばたすかるのだという信仰を

忘れないようにと、知らせてくださったのだと思うのです。親の思いに沿うこと、御用を一生懸命担うことによって、教会の、あるいは家族の運命を確実に変えてもらつたと思うのです。

教祖の道具衆として

只今は、年祭活動三年千日の3年目、大詰め的时候了。1年目から心してつとめきつた方にとつては、締めくくりの年であり、仕上げという気持ちがいよいよ強

いですが、年祭活動は、教祖が現身を隠された事情に思いを致し、仕切つて、親神様の思召に近づく歩みです。親神様の思召に叶うほど成人するのはとても難しいことですが、叶わないのであれば、せめてこの年祭のときにはここまで行こうと、目標を定めて、そこに到達する努力をすることが仕切るということだと思ふのです。

ようぼくは、教祖の道具衆と教えられています。道具衆は、陽気ぐらしができるよう、どこまでも心を尽くすことが仕事です。道具

にはいろいろな役割がありますが、自分はどういう働きをする人材なのか、ということを実感して、その役目をしっかりと果たすことが年祭活動だと思ふのです。

その働きは全ておたすけに繋がっているわけですから、自身の役割をしつかり確認していただき、それぞれの持ち場立場で、一生懸命、道具衆という意識を持つてつとめてくださいますようお願いいたします。それが教祖にお喜びいただけることになると思います。

「おたすけしなさい」と言われたら、「はい」と心勇ませて、「修養科に行きなさい」と言われたら、「はい」と素直に聞いて、「おつくしをしなさい」と言われたら、「はい」と本気になって、どこまでも仰せのままに心を尽くして努力をするところに道が拓けてまいります。

会長様の仰せになられたことは、親神様の思召と悟つてお通りくださるとともに、この年祭活動が皆様に取らまして、より良い運命の御守護を頂かれる旬であることを祈念いたします。

その後、昼食のバーベキューを
食堂で行ったあと、陽気ホールに
戻り、退所式。

参加者は、「雨で中止かなと思っていただけ、開催してくれてすごく嬉しかった。来年も友達を誘って参加したい」と笑顔で話した。



五月月次祭																					
祭典役割																					
祭主		扨者		扨者		てをどり		地方		ちやんぼん笛		拍子木		太鼓		すりがね		小鼓			
大教会長		守田清一		山本義範		座りつとめ		井筒文夫		今川政治		岡島秀男		加世田洋		井筒敏成		川畑澄博		岩切正義	
指図方		賛者		賛者		前半		西本義之		樋川泰士		立花善文		瀧本庄司		梶川和隆		吉田裕和		立花善三	
奥田正徳		中村俊和		湯川正信		後半		川畑正博		松森誠太		梶川芳征		河合善洋		今川聖一		新居里実		梶川和人	
井筒文夫		伝供		加世田洋		岩切正義		瀧本庄司		河端芳雄		湯川正信		奥田富美子		前会長夫人		会長夫人		湯川正実	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長		奥田眞治		河端芳雄		木村眞次		岩切孝子		竹内淳子		梶川文子		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治		奥田眞治	
大教会長																					

眞明組おやさと伏せ込みひのきしん

6大教会が心を一つに

ぢばに真実を伏せ込む



5月25日、26日の両日にわたり、「眞明組おやさと伏せ込みひのきしん」を、芦津大教会から分離した大教会を含め、6大教会で実施した。

昨年10月、「教祖百四十年祭仕上げの年に、眞明組として心を合



せて動くことで教祖に御安心いただこう」との声が上がった。芦津を含め、年祭活動の指針として、「ぢばへの伏せ込み」を掲げている大教会もあったため、眞明組で心一つに、親里でのひのきしんに汗を流そうとの思いから、合同ひのきしんが発案された。

25日は豊田山墓地の一般墓地区域の清掃ひのきしんを行った。午後1時、豊田山墓地旧斎場前に集合した参加者らは、おぢばを遙拝して、説明のあと各大教会に割り当てられた区画に移動。草抜きや、落ち葉掃きのひのきしんを行った。前日から雨が降り、当日も小雨が降ったり止んだりの天気の中、1時間という短い時間であったが、普段人目に付かない場所のひのき

しんに喜びの汗を流した。

午後2時のミュージックサイレンの後、大教会長が終了にあたり挨拶を行った(9頁に別掲)。

この日は日曜日ということもあり、多くの教会がこの日に合わせて団参を計画。和歌山から参加した上野山節子さん(91歳・紀内分教会)は「団参に行くまでは、体

力的に不安がありました。ひのきしんもみんなと同じように行動でき、そんなに疲れることもありませんでした。この半月ほど、なかなか眠れない日が続いていたのですが、おぢばから帰ってきたその日からよく眠れるようになり、おぢばの理はありがたいとつくづく感じました。これからも、なるべくおぢばに帰らせていただこうと思います」と感想を語った。

天理市在住の加世田もとよさん(26歳・大島分教会)は「芦津の女子青年さんたちと一緒に参加することができて、とても嬉しく思います。人数の多さにすごく驚いたし、大勢の方々と一緒に、教祖

百四十年祭という、一つの大きな目標に向かって、心を揃えてひのきしんができたことに感動しました。これからも、できるだけ毎月26日の伏せ込みひのきしんに参加して、年祭に向けて自分にできることを探していきたいと思います」と語った。

翌日26日は、ご本部月次祭終了後、西境内地での除草ひのきしんを行った。2日間の参加者は、眞明組全体で25日が約1千200名、26日が約700名にも上った。



26日は西境内地でひのきしん



眞明組おやさと伏せ込みひのきしん
大教会長挨拶

井筒梅夫



ございました。

さて、眞明組の先人たちがこのように寄り集まってひのきしんをさせていただいた最初は、明治14年、かんろだい石普請のひのきしんです。このときは、滝本山の石の切り出しから麓までの運搬を眞明組に、そして麓からお屋敷までの石の運搬を、後の船場大教会の明心組に、それぞれ教祖がそのお役を下されたのです。

当時、石造りのかんろだい建設は、教祖が最も望んでおられたことの一つです。その大切なお役を頂いた感激と誇りを胸に、なんとか教祖の信頼にお応えさせていたかどうかと、勇んでひのきしんをしてくださった先人たちの心境を想像しながら、私は今日、ひのきしんをさせていたできました。

私たちの信仰の原点は、おちばです。私たち一人ひとりが今日ようばくとしてあるのも、各

各の教会が存在するのも、全ては「おちばがあつてこそ」のことです。

教祖年祭の句は、この信仰の原点に立ち返る句でもあります。お互いにおちばで成人させていただき、おちばでおたすけいただけるように、固く心をちばに結んで、繁く足を運ばせていただいて、誠実をおちばに尽くし、伏せ込ませていただきたいと思っています。

そして、頂戴するちばの理を国々所々へ持ち帰って、これを足元で十分に生かして、先人たちのたすけ一条の道の後に、誇りと自信を持って続かせていただきますように。

教祖百四十年祭まで残すところ8カ月。大恩ある教祖にお報告させていただけるように、共に明るく勇んで成人の道を進ませていただきますことをお願いしまして、ご挨拶といたします。大変ご苦勞様でした。

皆様方には、今日はおちばへお帰りくださいませ、ただ今は「眞明組おやさと伏せ込みひのきしん」として、眞明組にゆかりのある皆様方と共に、清々しいひのきしんの汗を流すことができましたことは、大変ありがたい次第です。小雨の中のひのきしん、本当にご苦勞様でござ

教務部報

教人登録

木村真太郎（芦明德）

立教188年5月8日

教人資格講習会第151回修了

榎 つよ子（芦美屋）

立教188年5月11日

修養科第1005期修了

向井 良治（天津）

立教188年5月27日

おさづけの理拝戴《4月》

梶田 陸斗（紀志）

樋川 愛（甲邊）

林 漢輝（真明彰化）

大西 彩友（吉野川）

日檜 清幸（鎮名）

（拝戴日順 5名）

初席《4月》

（8名）真明彰化

（2名）海南、島原、芦広、

豊野、真明新營

（1名）直轄、昭大、島長、

芦山都、芦明德

（順序運びより 23名）

月例統計（自令和7年1月1日～至令和7年4月30日）

項 目 名 称 () 内教会数	初 席	の お 理 さ 拝 戴 け	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	10	5		
鞆 (13)	2			
東 津 (23)	2	2	1	
吉 野 川 (29)	2	3	1	
島 原 (16)	4	5		
日 方 (15)	1	3		
稗 島 (7)				1
本 津 (2)				
日 高 (2)				
始 良 (5)				
津 和 (12)	2			
門 司 (6)		1		1
當 別 (6)	1			
大 島 (26)	4	1		
沖 縄 (3)				
尼 崎 (2)				
四 ツ 山 (5)		1		
大 冠 (2)				
島 下 (1)				
天 保 山 (3)				
青 木 (1)				
芦 浪 (1)				
甲 邊 (1)		1		
芦 華 (1)				
天 津 (1)	1			
入 江 (1)				
豊 野 (1)	2			
紀 周 (3)	3			
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫眞洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)		2		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)	1	1		
真明彰化 (2)	10	1		
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
真 伯 (1)				
合 計 (209)	45	26	2	2

立教 188年 こども おぢばがえり

7/27～8/3



こども
おぢばがえり
オフィシャル
サイトへ

今年も芦津詰所では、夜のお楽しみ行事を
企画して、皆さんのお帰りを待っています

学生生徒修養会・高校の部

8月9日(土)～13日(水)

お道につながる高校生がおぢばに帰り集い、合宿生活
を通して絆を深め、陽気ぐらしのみ教えを学びます。

○内容 グループワーク、講話、レクリエーション

○受講御供 10,000円（受講時に詰所で集めます）

○申込メ切 7月25日

詳しい内容は、学生生徒修養会・高校の部の
ホームページでご確認できます。

